

学問の自由と計量分析

日時： 2021年3月3日（水） 10:30～17:00

場所： オンライン開催

料金： 一般 5,000円、学生 2,500円

講師： 佐々木 弾（東京大学）

定員： 40名

■本コースの概要

日本学術会議人事への「菅邸」による不当介入事件を契機に、頓に現代的な問題として浮上中の「学問の自由」。

本講では、計量分析で何が言えて、何は言えないのか、何を言うことが許され、何を言うことは御法度なのか、を受講者の皆様とご一緒に考えます。

0. 序論： 科学は「嘘」をつけるか？

真理探究を本旨とすべき科学研究ですが、そこに多少なりとも人為的な創意工夫や取捨選択の可能性はあるのか。事実とはそれを記述する者がいて初めて事実となる、とよく言われますが、研究者の個性はどこまで発揮できるのか。

1. 狭義の学問の自由

研究題材の選択とは、何について研究するか、だけではなく、その対象のどのような性質に着目しそれをどう分析するか、を含みます。特にこの後者の部分で、研究者の個性と学問の自由が発揮されます。

2. 「見ざる」自由

都合の悪いデータや資料は、見なかったことにして捨て、都合のいい情報だけにに基づき都合のいい「分析結果」だけを発表する、ということは、極論すれば全ての研究発表に程度の差こそあれ当てはまります。

3. 「聞かざる」自由

既刊のデータや先行研究結果、既存の分析ツールなどに依拠することは、研究の再現性・検証可能性を高めますが、引換に「創作性」を一定程度制限します。逆に既刊資料をあえて使用しないことで、即ち資料や分析手法の特殊性を以て、研究の独自性を主張することはそもそも正しいのか？

4. 「言わざる」自由

計量分析の結果は、それ自体は無機的な「数値」に過ぎません。それをどう解釈し、どのような含意を載せるか、にこそ計量分析者の「職人芸」の見せ所でもあり、計量分析の「作

品」としての価値もありましょう。

5. 終章：「偽装」と「自由」

政府統計偽装騒ぎで注目を浴びた、既刊資料そのものに含まれる「創作性」。人工物である以上、多少とも不可避免的に存在する、原資料の不備や誤り。それを使用する分析者は、それにどう受動的に対処し、また時に積極的にそれを利用した分析を行い、所期の言論を展開できるのか。

■注意事項

- ・本講と「計量分析セミナー」の他の講義との重複内容はほとんどありませんので、他講義を受講される方もされない方も本講のご参加は可能です。
- ・また、確率・統計や計量分析に関する高度に専門的な予備知識や参考文献も要求いたしません。
- ・一般に計量分析に関する講義・教本の多くが、計量分析の技術的・数学的な側面を論じているので、本講では重複を極力避け、計量分析の謂わば「社会的」な側面に着目し、分析者にはどのような学問の自由があり、それは科学研究としてどこまで分析者の裁量に委ねられるべきなのか、を検討します。

■資料等

基本、事前にダウンロード可能な形で配信する予定です。

なお、過年度に担当した計量分析セミナーの内容の一部は、拙著

『算数からはじめて一生使える確率・統計』（河出書房新社、2019年）

『統計は暴走する』（中公新書ラクレ、2017年）

に編集抄録されていますのでご笑覧ください。本講ではなるべく繰返しを避ける工夫を試みます。